

2023年度外国語学部FD活動報告

(英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科)

2023年度、外国語学部ではFD活動の取り組みとしてFD講演会を1回開催した。10月5日(木)17時半～19時にQ棟503教室において、中京大学国際学部教授の亙理陽一教授をお招きし、「デジタル・テクノロジーと外国語学習：過程にどう関わるか」と題して講演をしていただいた。近年、ChatGPTをはじめとするAI技術の急速な発達に伴い教育現場も大きな変革を迫られているが、本講演会ではそれらの新しいテクノロジーを外国語学習にどのように活かしてゆけるのか、さまざまな可能性や問題点が豊富な具体例とともに示された。講演後には活発な質疑応答がなされ、学部教員にとってたいへん有益かつ刺激的な講演であった。参加者は30名であった。

2023年度の各学科のFD活動の詳細は以下のとおりである。

英米学科

1) 【LL施設とTAの有効利用】

2022年度～2023年度9月までは、人間文化研究科(言語科学専攻)のハワイ人院生がTAを務めてくれたこともあり、卒業論文執筆のためのLL教室の個人での活用が卒論執筆の時期にあったが、2023年度は、後任のTAが見つからず、また、LL準備室の職員の退職もあり、特に後半はLL教室の活用はほとんどできなかった。また、LL教室は、2016年度入学生までを対象とした旧カリキュラムでは、ネイティブ教員の英会話授業(45分)とLL教室を使ってのリスニング授業(45分)が実施されていたCommunication in English(90分×週3回)で有効活用がされていたが、クォーター制が導入された2017年度入学生より導入された新カリキュラムでは、Communication in Englishがカリキュラムからなくなり、LL教室の十分な活用ができていない。また、ITの発達で、LL教室を使わなくてもスマートフォンやコンピューターで英語リスニングの機会が多くある現状を考えれば、LL実習費を学生から徴収してそれに見合う教育サービスを提供することは困難であり、LL教室を継続しないことを学科会議で決定した。

2) 【学科必修科目の内容や評価基準】【学科内FD】

「Academic English A」及び「Academic English B」のそれぞれの科目コーディネーターを中心に、授業内容と共通テキストの見直し作業などを行っている。

また、2024年度に向けて、AEBについてはコーディネーターのTony Ryan先生主催で、非常勤も含めた担当教員にZoomで集まってもらい、Reading & Discussion(2024.3.19, 10:00 am - 10:30 am)とWriting & Presentation(2024.3.19, 10:30 am - 11:10 am)のそれぞれについてFDを行い、それぞれの授業内容や教材について説明と情報交換を行った。

3) 【COIL授業】

2023年度も英米学科の幾つかの科目でCOILを利用した授業が行われた。具体的には、異文

化コミュニケーション、演習Ⅰ、演習Ⅳで学科科目としては実施された。これ以外にも、1年生は、共通教育の英語科目でもCOILを体験している。

4) 【学科運営のための学科内の役割分担の理想的な方法を模索】

全学的な役割や学部の仕事を考慮して、学科内での役割分担の効率化を模索し、前年度よりは前進した部分はあるものの学科長が突如の対応事項（学務、学生、教員など）に十分にかかわれるように、ルーティン化された仕事の役割分担が引き続き課題である。

5) 講演会の実施

12月と3月に以下の2回の学科主催の講演会を実施した。

○第1回目：2023年11月7日（火）15:30～17:10

講演者：Miles Leeson (University of Chichester)

演題：Literature and Trauma: A Historical Overview

○第2回目：2024年3月29日（金）15:30～17:10

講演者：Susan Rose (Dickinson College)

演題：Contemporary Indigenous Histories: Colonizing Education; Intergenerational and Collective Trauma; Loss and Reclamation

6) 【英語教員セミナーの実施】

2023年8月2日（水）～8月4日（金）[9時20分～15時00分]の3日間、90分授業を9コマで、「英語を教えるための背景知識とコミュニケーション力向上（Background knowledge and practical training to help teachers to improve their English teaching skills）」をテーマに、次の7名の講師で実施した。川島正樹（南山大学外国語学部教授）COCHRANE, Robert（南山大学外国語学部講師）堀田隆一（慶応義塾大学教授）CRIPPS, Anthony（南山大学外国語学部教授）WILSON, John（南山大学外国語学部講師）今井隆夫（南山大学外国語学部教授）TEE, Ve-Yin（南山大学外国語学部准教授）。

7) 【Oral Interpretation Festival】

2023年6月17日13時から、第6回全国英語オーラルインタープリテーションフェスティバルを開催した。参加校は、名古屋市立桜山中学校、静岡県立静岡商業高等学校、名古屋市立向陽高等学校、三重県立四日市高等学校、名古屋市立北高等学校、名古屋市立桜台高等学校、愛知県立明和高等学校、エスコラピオス海星高等学校、南山大学の8校であった。

スペイン・ラテンアメリカ学科

1) 2023年度は、2022年度末に2名の教員が退職し、1名の新任教員を迎えた。新任教員に対しては、学科内で適切なサポートを行い、スムーズに学科業務に慣れていただくよう、学科全体で心がけた。新任教員については、慣れない環境の中、2024年度に行われる海外フィールドワークの準備をはじめ、学科共催講演会の企画・運営などで多大なる貢献を頂いた。人事についても、2024年度から特別任用講師を2名迎えることができた。

- 2) ラテンアメリカ研究センターと連携を密にし、国内外の優れた研究者・実務家を招いて講演会・研究会を開催した。
- 3) 国内外のカトリック大学との教育・研究面での協力・交流関係をさらに広げる意思はあるものの、なかなか順調には事が進まなかった。2020年度より中断していた教員の相互訪問による輔仁大学（台湾）との交流の再開は出来たが、本学科と上智大学外国語学部イスパニア語学科の間で海外フィールドワーク B(コロンビア)の共同実施は断念した。また、引き続き、本学のラテンアメリカ研究センターと上智大学のイベロアメリカ研究所・ヨーロッパ研究所との交流を通じた連携が可能であるかどうかの検討を進める。
- 4) 学科の教育指導冊子 *Un, dos, tres al español* は、2024年度初めの発行を目指す。学科のスペイン語教育に関するセクションについて大幅に改訂作業を行い、その他の部分についても加筆修正ができた。
- 5) 学科必修スペイン語科目、あるいは、その他の言語科目については、言語科目コーディネーターを中心に、カリキュラム改正に伴う教員配置の調整を行なった。言語科目コーディネーターを中心として、ネイティブ教員に対しては、日常的に意見交換の機会を設けている。
- 6) 外国語検定試験(DELEや西検)の受験状況に関する学科学生へのアンケートを実施し、受験・取得状況を把握するとともに、積極的な受験を推奨している。2023年度はグループフォームからマークシート方式へ切り替えて実施してみたところ、回収率の上昇が可能となった。
- 7) 2023年度に行なったカリキュラム変更の効果は、まだ当該入学年度生が該当学年に達していないため、効果はわからないが、4年生の必修科目の学期配置変更は未だ過渡期である。2024年度からはスムーズな運用となるように心がけていきたい。
- 8) スペインでの「海外フィールドワーク A」について、2022年度に引き続き現地での実施ができた。「海外フィールドワーク B」(メキシコ)および「海外フィールドワーク B」(コロンビア)は実施できなかった。「海外フィールドワーク B」については、2024年度の実地での再開を目指したい。
- 9) 2022年度に引き続き、2023年度も学外におけるポルトガル語のスピーチコンテストにおいて入賞者がいた。ポルトガル語のスピーチにコンテストにおける学生指導については非常勤講師が多なる貢献を行なっている。
- 10) スペイン語劇について、2023年度は実地で、古典を取り入れた劇を実施することが出来た。

フランス学科

- 1) 今年度当初は7人体制での学科運営であったが、秋学期より教員1名が留学したため、フランス語科目や学科科目において教員配置を変更することになったが、学科内で定期的にミーティングを開催し、カリキュラムおよび授業運営に問題がないか検証しつつ、教育

体制に不備が生じないように対応した。

- 2) 専攻分け説明会を対面で開催し、社会専攻で扱われるテーマをより具体的に示すなど社会専攻の魅力を学科1年生に積極的に発信し、専攻間の偏り解消に努めたが、結果的には、昨年度同様、今年度も二専攻間の人数の偏りはまだ解消できなかった。3年次からのゼミ選考についても、一部の教員のゼミへの希望が集中する傾向があるため、選考方法について議論を重ねたが、具体的な対策はまだ講じることはできなかった。
- 3) 履修ガイダンスおよび学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトやSNSの充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。また、「海外フィールドワーク」は、4年ぶりにオルレアン大学、リヨンカトリック大学の2拠点での第2クォーター開催が実現した。
- 4) 学生の海外留学を促進し、派遣留学生数が昨年度より増大した。フランス語教育促進のための学生によるフランス語劇を12月に上演した。また、日仏会館主催弁論大会や、京都外国語大学主催による全日本学生フランス語プレゼンテーション大会に参加する本学科生の指導を行い、フランス語を活かした各種課外活動への参加を奨励した。
- 5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定の団体受験を推奨した。さらに、アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会と協力関係を築き、学科生たちの交換留学を奨励するために、DELF・DALF試験やTCF試験などの外部語学試験の団体受験を実施した。
- 6) 学科の Facebook およびウェブサイトを更新し、広報活動を継続的に行った。また、オープンキャンパスや高校における模擬授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。
- 7) フランス語圏に関する専門知識を有する専門家を招いて教員の研究・教育支援に関する講演会を開催する予定であったが、今年度は実現しなかった。

ドイツ学科

- 1) ドイツ語教育の質および教員の資質・能力向上のため、主にドイツ語科目を担当する教員を中心に定期的に情報共有・意見交換を行い、教員間の密接な連携を図った。連携には外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況全体に目配りが届くよう努めた。
- 2) コロナウイルス感染拡大の影響で中断されていた海外フィールドワークを再開した。ただし参加費高騰のためか申込者が少なく、1箇所だけ（ベルリン）での開催となった。また国際化推進の面では、COIL 授業としてソウル国立大学、輔仁大学、モンゴル教育大学のドイツ語学習者と本学ドイツ学科生がドイツ語で討論・交流した。加えて授業外においても、COIL 型交流の一環として、本学ドイツ学生がマインツ大学（ドイツ）と協働でビデオを作成するプロジェクトを実施し、交流を支援した。また、国際化推進事業の一環として、ドイツから学生2名を招聘し、ドイツ学科生との交流を大いに促進した。今年度はさらに、東京横浜独逸学園（Deutsche Schule Tokyo Yokohama）の生徒を招いた交流プロジェクトを実施した。

- 3) ドイツ学科主催の催し（ヨーロッパ研究センターとの共催のものを含む）として、以下の講演会・レクチャーコンサート・研究会・ワークショップを開催した。①2023年4月24日「近代歴史学の父、ランケ」（講師：佐藤真一）、②2023年6月13日「リュートの響き、古楽への道」（講師・演奏：中川祥治）、③2023年7月3日「ドイツ語を学ぶことの意義」（講師：草本晶）、④2023年10月9日「ヴァルザーの言葉／クレーの絵：メディアを横断する芸術創造」（講師：柿沼万里江、若林恵）、⑤2023年11月23日「ヨハン・ヨアヒム・クヴァンツとバロック音楽の表現技法」（講師・演奏：Marion Treupel-Franck、金一恵）、⑥2023年12月14日「研究会：ドイツ語教育における文学の活用」（Anette Schilling）、⑦2023年12月15日「ワークショップ：Wörter malen Bilder. Wie funktioniert das?」（Anette Schilling）。いずれの催しも非常に充実した内容であり、特にレクチャーコンサートには多くの来場者があり、反響も大きかった。
- 4) 学科ホームページを通じて、学科独自の情報発信に努めた。今年度も、留学体験談やインターンシップ経験談、学生の活躍などを多く掲載することができ、ドイツ学科を受験しようとしている高校生へのアピールとなった。
- 5) 今年度は、津島高校、岐阜東高校、清林館高校、浜松聖星高校、津島東高校、多治見西高等学校でそれぞれ模擬授業を行った。音楽学、文学、外国語教育学、社会人類学など多様な専門分野の教員が授業を行い、大学での学びを体験してもらう機会を作ることができた。
- 6) 学生の勉学の支援・成果発表の場としては、非常勤講師の丸山達也氏が夏期集中科目「ドイツ語実践演習 B1」を担当し、最終授業においてその成果発表会を行った。また、9月に半田赤レンガ建物で開催された「ドイツ・フェスティバル」では、中屋ゼミ生が研究成果を一般にも還元することができたほか、学科生がボランティアで参加し、地域貢献にも繋がった。そのほか、12月に南山大学で開催された第23回名古屋圏国公立大学インターゼミナール（総参加者数約40名）では、中屋ゼミ生2名が参加した。各自ドイツ・EUの政治や経済に関する卒業研究に向けた内容を発表し、他大学学生と活発な議論を行った。また、「ドイツ語暗誦大会」を再開することができ、対面で実施した。一方、同日開催予定であった「ドイツ語弁論大会」は、参加申込者が少なかったため、開催することができなかった。
- 7) Goethe-Institutのドイツ語能力検定試験を12月に学内で実施した。また、ドイツ語関連試験の合格者情報およびドイツ語関連コンクール等入賞情報の把握に努めた。12月中旬時点での合格者数（自己申告）は以下の通りである。A1レベル：3名。A2レベル：1名。A2レベル（一部）：1名。B1レベル：6名。B1レベル（一部）：6名。B2レベル：2名。独検3級：1名。独検2級：2名。「第2回ドイツ語教育部会アイデア賞コンテスト」優勝1名、2位1名。「第47回南山大学ドイツ語暗誦大会」3位1名。「日独ユースサミット」に選抜され参加した学生1名。
- 8) ドイツ文化研究会およびドイツ学科生の縦のつながりを強化する学生交流センター団体Kreisなどの課外活動への支援を継続した。
- 9) キャリア教育の一環として、1年生を対象とする学び方講座をQ1に、学科生全員を対

象とするキャリア入門講演会を Q3 と Q4 にそれぞれ 1 回ずつ実施した。Q4 に実施したキャリア入門講演会では、ドイツ学科卒業生が大学での学びと仕事の関係や就職活動で実践していたことなどについて講演していただき、学科生にとって非常に充実したキャリア教育となった。また 6 月には VGJ（フォルクスワーゲングループジャパン）の豊橋工場見学会を実施し、3 名がこれに参加した。VGJ での長期インターンシップにも継続的に学生が参加した。加えて、1 名の学生がベルリンの動物保護施設で長期インターンシップに参加した。

アジア学科

- 1) 学科必修科目とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点および受講生の学習状況について意見交換をおこなった。外国語については、学生の受験および合格状況を把握するためにアンケートを実施した。
- 2) 学習成果測定の試みとして作成した卒業論文評価用のループブックについて、学科会議で点検を重ね、卒業論文判定会議において活用した。
- 3) 2020 年度から実施を見合わせていた「海外フィールドワーク A/B」を再開した。実施前ならびに実施中の期間に、派遣先大学のスタッフとの協議を重ねてフィールドワークの円滑な実施を心がけた。
- 4) 学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、Zoom やメール、SNS を活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。また、授業運営についても学科教員と非常勤講師の間で随時連絡をとって意見交換をおこなった。
- 5) 学科作成ホームページに、今年度も幾つかの学科科目紹介を追加した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。また、学科公式 Instagram でも写真や記事の適宜更新に努めた。
- 6) 2020 年度から中止としたインドネシア語スピーチコンテストを再開した。学外の高校生や社会人の参加も得て盛会となった。
- 7) 中国・台湾およびインドネシアへの国費留学希望者に対する支援として、個別相談への対応をおこなった。面接等、国際センターの業務への協力も継続しておこなった。
- 8) 輔仁大学の学生と SNS で交流するプログラムを 2023 年度も継続して実施した。課外でのグループ単位や個別での交流に加えて、1 年次および 2 年次の授業科目（「アジア学入門 B」、「基礎演習 II」など 4 科目）でも発表・意見交換という形で交流をおこなった。
- 9) FA.com など在学生の課外活動への支援を継続した。
- 10) キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、2 年生を対象とするキャリア入門講座を Q3 にそれぞれオンラインで実施した。とりわけキャリア入門講座では、講師の話に触発されて台湾留学を決めた学生がいたほどで、2 年生にとっては有益であった。

以上